

## 廣田收先生を送る辞

一九八一年四月から四十年近く、同志社大学で教鞭を執ってこられた廣田收先生が、二〇二〇年三月、ご退職の時を迎えられる。まことに僭越ながら、本学で一緒にさせていただいた同僚の一人として心からお礼の言葉を申し上げたい。

先生は、『源氏物語』や『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を中心に幅広い研究を展開してこられた。研究の細分化の弊害が叫ばれて久しいが、廣田先生のご研究は、『古事記』に描かれるような神話と『源氏物語』のようないわゆる作り物語と中世の説話集に収録される説話とに共通して見られる話型に注目して読みを深めたり、『紫式部集』という歌集が、歌の配列によって物語を構築していることを論じたりと、ジャンルを越えたダイナミックな把握によって、文学作品の面白さを鮮やかに提示するものである。『宇治拾遺物語』の中の昔話を論じては、細やかな類話研究の対象を韓国や中国のみならずヨーロッパにまで広げ、時間・空間を越えた比較によって、『宇治拾遺物語』の特質を明らかにする。先生のご論文を拝読すると、こうした研究対象の豊かな広がりの中で、いわゆる実証的方法と理論的方法が美しい調和をもって一篇を織りなしていることが見てとれるのである。そして何よりも、廣田先生が研究についてお話しなされる時、それはそれは楽しそうで、言葉は泉のように湧き出してくる。学問とはかくも楽しいものであったのだ、という原点をいつも思い出させてくださるのである。そのような学問に対する姿勢を含め、中世文学を勉強している者として、廣田先生のご研究からは多くのことを教えていただいた。

教育の場面でも同様で、私は卒業論文や修士論文の口頭試問、あるいは博士論文の審査で、廣田先生とご一緒する機会も多かったが、折々に発せられるご質問は、実に鋭く、枝葉末節にこだわりすぎて、ややもすれば見失ってしまいがちな問題の本質を浮き彫りにし、そばで聞いていてハッと気づかされることしばしばであった。すぐれた教育者としての一面は、博士号を授与された多くの大学院生を育てられたことに顕著にあらわれている。

学科運営においても、議論が行き詰まった時に、問題を大づかみにして、本質を突く提案をしてくださる先生に、私たちはすっかり甘えてきてしまったと思う。

去る二〇一四年一月には、国文学専攻設立六〇周年・国文学会創立五〇周年を迎えたが、本年度で七〇周年・六〇周年に向けての折り返し地点を過ぎたことになる。学科・専攻としても新たな展開を考えるべき時であり、こうした大事な時期に先生がご退職されることは、私たちにとって本当に寂しく、心細い限りであるが、これまで先生に教えていただいたことを十分に生かしていけるよう努力する所存である。

廣田先生、これからもどうぞ私たちを厳しくあたたくお導きください。先生のご健康とご多幸をお祈りし、つたないながら送る言葉といたします。

植木朝子